

# 水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

編集事務所の昼下がり ル・マルス 2 走る・その三 デイヴィッド・グッドマン 22

キリコのコリクツ 玖保キリコ 9 病気・カフカ・音楽(その一)高橋悠治 24

本橋先生の整理学 12 音楽時評 坂本龍一 28

料理がすべて 田川律 18 水牛かたより情報 30

# 編集事務所の昼下がり ル・マルス 田中和男

水牛 この事務所、いつきても変わってませんね。四谷愛任町の古ビルの四階ね。この十年間、いつきても、まったくおなじ感じがする。田中さんの白髪がふえただけ。

田中 いやア、ふっふっふ。

水牛 あのさ、この「グラフィケーション」っていうのは、田中さんたちの「ル・マルス」でだしてる富士ゼロックスのPR雑誌なのね。いまは、おも

に先端科学や技術の問題をとりあげてるわけ。そのくせ、ここにはワープロもないんだもんなア。

田中 はっはっはア。そういえば、こないだ室謙二さんの事務所でパソコン通信なるものを見せてもらいましたけど、あれも半信半疑だな。「コンピュータ」とか……

水牛 「ザ・ソース」とかね。アメリカのデータベース。

田中 ちょうどフィリピンの問題がは

じまったとこだったから、「じゃ、きょうはワシントン・ポストの論説をとりますか」なんて。

水牛 ふふふ。それは室がデモンストラーションやったんだな。でも、かれなんか実際に考えてるのは、そういう他人より早く情報をとるということよりも、パソコンを対話的なメディアとしてつかえないかというようなことなんでしょう？

田中 そう、やりとりのおもしろさね。電子メールとか電子会議とか……

水牛 電子雑誌とか？

田中 うん。おもしろいんだけど、でも、もうちょっと先だな。

水牛 印刷雑誌をあまく見てもらっちゃこまるよ。で、「グラフィケーション」はいま何年目？ 十年ぐらい？

田中 いや、十五年ぐらいですね。はじめの十年は文化論が主だった。スポンサーが外資系でしょう。外資系とい

っても半々なんですけどね、いま考えると、アメリカの企業が日本でうけいれられやすいイメージをつくるには、日本文化に対する理解をしめす必要があったんだらうと思うんです。最近のIBMなんかもそうですけどね。ぼくはそういうことはぜんぜん考えずに、タイミングよく大衆文化論とか日本文化論とかをやる雑誌があるというんで、それではじまったんです。

水牛 あと複製文化論とかね。  
田中 そうそう。そっちまで強引に裾野をひろげていった。当時は企業も余裕があったから、ビジネスに直接かかわらなくても、まあ、講座でもやるような感じ……

水牛 あのころの企業PR誌っていうのは、版元・取次・書店という、いままでの流通システムとはちがう場所での出版のころみだったと思うのね。地域のミニコミなんかとは別の場所

の「もう一つのメディア」だったんだね。とりわけ「グラフィケーション」の場合は、ミニコミとの交通がさかんだったでしょう？

田中 そこらへんは意識的に、ほかのミニコミとくっつけようとしたんですよ。それまでもサントリーの「洋酒天国」とか資生堂の「花椿」とか、有名なPR誌がいっぱいあったけど、どれも商品の流れにそって流れていくというか——たとえば「洋酒天国」はバーでくばってたし、「花椿」は化粧品屋の店先でしょう。それは江戸時代とおなじなの。江戸時代にも小間物屋や呉服屋がだしたPR誌みたいなもんがあったんです。その延長上だから。

水牛 そりゃそうだ。  
田中 だけどゼロックスは地盤もないし、そういう流通の流れにそってPR誌をだしていくということはできなかつたんです。それよりもむしろ野次馬

に徹して、ミニコミ誌とかタウン誌に似たものをつくるほうがいい。

水牛 ライターなんかもミニコミ的な人がおおかったね。ぼくなんかもしばしば助けていただいた。(笑) おなじこと書いてもミニコミじゃお金にならないけど、ここだとホラ……

田中 はっはっは。

津野 すごいありがたかった。金のない連中は、みんなずいぶん世話になったんじゃないかな。

田中 そのへんはよくわかんないけど、まア七〇年代ですよ。

水牛 そのあと「教育」や「子供」にテーマが移ったんでしたね。

田中 ええ。だからミニコミ的なイメージではじめながら、だんだん総合雑誌的なつくり方にひろがっていったみたいね。

水牛 ゼロックスっていえば、やっぱりハイテクの世界じゃないですか。そ

ういうところから問題はでなかったんですか？

田中 いや、まだハイテクじゃなかったのね。ビジネス・マシーン。つまり事務機なの。ほら、あるでしょう、ガシヤンとボタンを押すとお金がでてくるの。レジスター？ あんなようなイメージですよ。

水牛 そうかなア。それとはちょっとちがうんじゃない？

田中 いや、あの程度じゃないかなア。原理的にはさ、ゼロックスっていうのは日光写真とおなじで、それ以前は青図でしょ。つまり光で反射させる。それをただ静電気を利用して定着させるという、その点では技術的にすこしすすんでいるけど、原理的には素朴なものだと思えますけどね。オフセットだったら水と油、日光写真だったら薬品の反応でやることを静電気でやる。それだけのちがいですよ。

水牛 田中さんとは、いっかんしてそういうふうにやってる。そこがおかしいね、ハイテクのくせして。

田中 またまた。(笑) 自分ではあまり意識してないんだけど、仕事のぜんぶをここでやっちゃいけないと思ってるの。分業がいい。絵だってね、そりゃあ自分で描けば描けるんだよ。

水牛 あ、そうか。もともとは絵の人なんだものな、あなたは。

田中 まあ。「こんなのオレだって描けらア」というような下手くそなものあるけど、それを自分で描いちゃいけないと思うのね。そこそこでグッと我慢して、どんどん若い人がでてくるのを待つべきだと思う。(笑) えらそうなこといっちゃいますとね。

水牛 いいんじゃないですか、ふえた白髪に分ぐらい威張ったって。「ル・マルス」って編集プロダクションの走りみたいなのだったのかな？

水牛 なるほど。そういうふうに考えて、田中さんはミニコミとの共通点をさがしたんだな。(笑)

田中 そういうところもあったかもしれないけど、まア、複製ってのはおもしろいんですよ。映画とか、ほかのメディアだってそうだと思いますけど、時代の精神みたいなものにかさなってますからね。

水牛 それでよくワープロとかに関心もたないでいられますね。

田中 いや、すごく関心はあるんだけど、なんか規格とかがあいまいな気がしてね。タイプライターみたいに法則がきまってる、だれがやってもおなじようにできるというふうになればいいんだけど、ちょっとまだ複雑すぎるような気がするんだよね。機械は素朴なほどいいんですよ。

水牛 それは異論ないけど、それこそいまエレクトロニクス産業がめざして

田中 「コスモPR」とかの大手はありましたけどね。

水牛 ぼくなんか、そのうち編集はプロダクション主体になるだろうと思ってるんだけど、それもよしわるしでき。たぶん映画とかテレビとおなじ下請けによる業界合理化にゆきつく可能性のほうがつよいよね。

田中 ウチもはじめたときの気分はそうだったな。映画屋さんのやり方で、月給じゃなく、もうかった分はぜんぶギャラとして分配しますというシステムではじめたの。

水牛 独立プロのシステムね。

田中 うん。会社に残す必要はない。ぜんぶ分配しちゃうという。

水牛 何人ぐらいいいたの？ 田中さんと高田さんと……

田中 あとカメラマンが三人、デザイナーが三人。

水牛 そんなにいたの！

いるところじゃないですか。「ビューマン・インターフェイスの日立です」とかいってさ。

田中 速記者なんか、みんなワープロになりましたね。おっしゃるとおり、そりゃあ自分でやればいいんですけど、ウチはね、もともと速記はぜんぶ外にだしちゃってるんです。そこは手をつけたくないんです。

水牛 いそがしいから？

田中 それもあるし、ホラ、日本から速記者がいなくなるとさびしいじゃないですか。

水牛 はっはっは。

田中 ああいう職業をうばっちゃいけない。あれも早稲田速記とか何十年かの伝統があつて……

水牛 田鎖鋼紀さん以来のね。

田中 うん。そういう仕事をちゃんとやる人がいたほうがいいと。それをなんとか残していかなければと。

田中 ここ以外の仕事をやってもいいということだね。自分一人で処理できる仕事は自分でやって、みんなの力を借りなければならぬ仕事はみんなで相談してやるというふうになってた。ぼくが統率して、その収入はみんなに分ける。つまりフリーの職人があつまった協同組合的なたちね。

水牛 自由な職人の自由な連合ね。

田中 そのころは映画なんかもやったんだよ。とびこみでPR映画とかコマーションとか。いそいで映画の専門家たちをあつめて、こっちは素人だから知ったかぶりして。

水牛 でも、そういうかたちでつづけていくのは、この世では、なかなかむずかしいでしょう？

田中 やっぱり法人としての蓄積を考えなきゃダメなのね。だけど最初は経営のことなんか分かんないから、ドンブリ勘定っていうか、蓄積ゼロ、ぜん

ぶ分配しちゃった。それがいちばんス  
ッキリしてるんだけど、企業としての  
力はたくわえられない。

水牛 そういうこと。で、いまは何人  
でやってるの？

田中 常勤は三人。ぼくと高田と、も  
うひとり若い人と。ほかにデザイナー  
とカメラマンが三人。

水牛 おもな仕事は「グラフィケーシ  
ョン」と、あと川崎市の文化雑誌があ  
りましたね。

田中 ええ。

水牛 それがわるいっていうんじゃな  
いけど、自治体が自分とこの雑誌の編  
集を外部にたのむってというのは、どう  
いうことなのかな？

田中 本来はおかしいんだけど、そう  
いう仕事に行政が人間をさけないとい  
うことがあるんだね。なんとなく自信  
がないということもあるし。でも、本  
当は、もっと素朴でいいと思うんだよ

ね。それで、ぼくもいつもいつてると  
ですよ、「編集は自分たちでやったほ  
うがいいんじゃないの」って。だんだ  
んなれてきたみたいですけどね。

水牛 文化的な仕事っていうと、自分  
とくに経験を蓄積しないで、どんだん  
外にだしちゃう。なんでもそうだもん  
ね。そのことで風通しがよくなるって  
いう利点もあるけどさ。

田中 結局、住民の感覚とはなれちゃ  
うとダメなんですよ。だから、いざれ  
は内部でだすべきなんだけど。ただ意  
図としてはね、啓蒙っていうとおおげ  
さだけど、市の文化団体とか行政内部  
のいろんなセクションを刺激したいっ  
てことがあったみたいね。文化につい  
ての関心をふかめるためには、とりあ  
えず、ちょっと洗練されたものが必要  
だと、そういうことではじまったみた  
いですね。

水牛 いや、田中さんぐらいのところが  
田中 いちばん最初は、七〇年代のは  
じめに「在日朝鮮人」を特集したのね  
ビジネスとしての多国籍企業にはいろ  
いろ厄介な問題があるけど、文化の問  
題としては間口が広いから、こっちと  
してはやりやすいんです。

水牛 すくなくとも天皇制にはならな  
いわけだ。

田中 そうそう。そこからはなんとか  
逃げさせる。

水牛 多国籍企業のPR誌に、ふつう  
の商業雑誌よりも自由なところがある。  
逆説的だね。

田中 なんといっても売る必要がない  
ですからね。まア、どっかで企業のイ  
メージと抵触するとは思うし、あまり  
矛盾するとバサッとやられるんだらう  
けど、いままでそういうことはなかつ  
た。だからビジネスっていうのは、  
意外とバカにできないと思うんです。  
商売とダブらせながら考えていくと、

いっしょにやるのはいいと思うの。本  
気でとっくみあいやるんだから。そ  
うじゃなくて、そのやり方が自動的に  
ふくらんでって、それこそ電通とか博  
報堂がでてきたらさ、自治体もクソも  
なくなっちゃうでしょう。結局は、い  
ずこもおなじ文化的な中央集権がくり  
かえされるだけで。

田中 そういえば、「宝島」をだして  
るJICCがそうでしょ？

水牛 あそこは区とか町レベルまで、  
まるでジャータン爆撃みたいになって  
ますよね。日本中、板みたいになっ  
いらにして、それで金をもうけたんだ  
もんね。

田中 ああいうところが、もっとでてく  
るんじゃないかな。

水牛 話をかえましようか。(笑) い  
ままでの「グラフィケーション」で、  
どの号がいちばん記憶にのこってます  
か？ 「崔承喜」特集？

田中 うん、ひじょうに印象ぶかいで  
すね。あの号はまったくなくなっちゃ  
ったもんね。

水牛 いわゆる「半島の舞姫」ね。対  
日協力の疑いとか北で肅清されたとか  
いろいろ複雑な事情があって、それこ  
そモンロー級のスーパースターだった  
のに、日本どころか、韓国でも共和国  
側でも、あえて無視されてきた。PR  
誌といたって、ああいう大胆なこと  
ができるんですからね。

田中 一つには、ただの民族資本じゃ  
なくて多国籍企業だということがある  
んですね。韓国とか東南アジアにも需  
要をもっている。そういう市場性があ  
るから、日本の文化とそれぞれの国の  
文化との関係についても無関心ではい  
られない。あのころは「柳宗悦」特集  
もやったし、ほかにもいくつか手をつ  
けてるんですよ。

水牛 そうでしたね。

田中 そうですね。韓国の文化とそれ  
ぞれの国の文化との関係についても無  
関心ではいられない。あのころは「柳  
宗悦」特集もやったし、ほかにもいく  
つか手をつけてるんですよ。

水牛 そうですね。韓国の文化とそれ  
ぞれの国の文化との関係についても無  
関心ではいられない。あのころは「柳  
宗悦」特集もやったし、ほかにもいく  
つか手をつけてるんですよ。

田中 そうですね。韓国の文化とそれ  
ぞれの国の文化との関係についても無  
関心ではいられない。あのころは「柳  
宗悦」特集もやったし、ほかにもいく  
つか手をつけてるんですよ。

田中 そうですね。韓国の文化とそれ  
ぞれの国の文化との関係についても無  
関心ではいられない。あのころは「柳  
宗悦」特集もやったし、ほかにもいく  
つか手をつけてるんですよ。

てけばいいんで、なにがなんでもビルを建てなけりゃとかいうことはないからさ。みんな身すぎ世すぎでやってるだけだから気楽ですけどね。ふつうは車を買ったりとか、もっと手びろくやるんだらうけど、ウチにあつまってる人たちは、どうもそういう意欲がないんで……

水牛 はっはっは。

田中 わるくいえば、自分のカラからでようとしない。なんか半端なことをやってるんですよ。

水牛 そうかもしれないけど、ちょっとちがうと思うの。こういう場所に田中さんみたいな人がいて、「ル・マルス」みたいな組織があるというのは、いろんなやつにとって力になりますよ。さっきもいったけど、ぼくも経済的に苦しいときに、「ル・マルス」にすがりついて食わしてもらったおぼえがあるもん。なんていうかき、その人がそ

の場所にいなくなると、みんな、なんか生きにくくなる——そういうことがあるんじゃないかな。

田中 いまさらスポンサーにゴマするわけじゃないけど、経営者の平均年齢がわりと若かったから、無名の新人とかユニークな人とかを起用して、それで雑誌の特徴をだしていくことに抵抗感がなかったのね。大先生に書いてもらったなら、そこにならず無名の人をくみあわせるとか、そういうことはある程度やれたと思ってますね。だから「むかし売れないとき助けになった」と、あとになっていわれることがよくあるんです。それで有名になってからでも、多少はムリがいえるとかね。

水牛 ここに一人、いつまでたっても有名にならない人がいるけどね。

田中 はっはっは。それはそれでいいんじゃないですか。

## キリコの コリクツ



## 玖保キリコ

得意なもの？ と尋ねられると、私は何も言えなくなってしまうのだが不得意なものは何か？ と尋ねてくれれば、いくらでも答えられる。

不得意なものの中でも、まっ先に私の頭に浮かんでくるのは「名前をつけること」である。

マンガを描く商売をしていると、この私が不得意とする作業——名前をつけるということ——をせずに済ますわけにはいかない。

話はあらかじめできていたとしても、登場人物たちの名前が決まらなければ彼らはちゃんと動いてくれない。

だから、名前が決まっていけない状態というのは、私の心を非常にくらくくする。

現在は、それほどでもないが、プロになる前の頃は、名前を考えるのがいやで、KとかFとか登場人物たちの名前を記号化して済ませるわけにはいかないだろうかと悩んだりしていた。

ただ、そうすると、まるで「観念マンガ」になってしまうので、実行はしなかったのであるが。

それよりもっと前の時代——つまりアマチュアと呼ぶよりは、単なる遊びであった時代——の私の描いていたマ

ンガの登場人物たちの名前は、ひどいものであった。

「チェチュリア」

「ジュヌヴィエーヴ」

今だったら、赤面を通り越して大笑いといった、これらの名を恥ずかしいという意識もなく、使用していた。

そういうゴテゴテした名前が、当時は好みであった。そういう年頃だったのだ。まったく国籍も時代も考えていない名前のつけ方だった。

ちなみに、彼女らは、たいてい、金髪に緑の瞳である。で、何故か、彼女らの親友、もしくは姉妹とか従姉は、栗色の髪で、瞳は青だったりする。

もちろん、これらは、ギャグマンガではなく、7・6頭身（8頭身以上の頭身がハヤるのはもっと後である）の美人で頭の良い少女が活躍するシリアスなストーリーマンガである。

彼女らは、複雑数奇な運命の歯車に

巻き込まれ、出生の秘密が、二重三重に暴かれていくのであった。

あーっ、大笑い。

このように、当時の私のマンガの登場人物たちの名前を挙げていくだけでも、かなり楽しめると思うのだが、残念なことに、自分のつける名前は恥ずかしいと気づいてしまった、ちょっと昔の私によって、これらのマンガは処分されてしまった。

若いということは、本当に心の狭いことよ。

故に、私の小学校〜高校にかけて描かれた、エンピツ描きのすばらしい作品は、ただいま存在しない。

とって置けば良かった。ぶつぶつ。

そういうわけで、自分でつける名前のかっこ悪さに気づいた高校時代から途端に私は名前をつけることが、わずらわしいと思うようになってしまった。いったん恥ずかしさを知ってしまった

私は、もう外国ものが描けなくなってしまった。

本格的に投稿を始めた大学時代の作品の人物たちは、すべて日本人である。それでは、日本人の名前なら、上手につけることができるのか？ というところ、そうでもない。もっぱら、漢和辞典を愛用した。

おかげで、肩の張る名前が多かった。彼、彼女らは自然に素直に動いてはくれなかった。名は体を表すというものな。ふむふむ。

実在の人間なら、名の前に存在があるけれど、マンガの中の人間は存在の前に名があるということか。

で、プロになった現在はどうか、というところ、やはり、名前をつけるということにおいては、進歩がない。

自分のペン・ネームなんて、すごくいいかげんだ。「キリコ」はまだいい。ジョルジョ・デ・キリコから取ったの

だもの。どうとでも、アカデミックにゴマ化せる。しかし、「玖保」の方はそうはいかない。ええい、バラしてしまおう。「玖保」というのは「長久保」のクボなのだ。「長久保」というのは私の家の近くにあるバス停なのだ。

ローカルな話で申しわけない。

「長久保キリコ」では、あまりとはいえあまりな名前なので（神楽坂カヲルみたい）「長」を取って、「久」にめでたそうな「王」をくっつけたのだ。この話を始めたときは興味シンシンで

私のペン・ネームの由来を知りたがっていた人々も、話が終わる頃には、すっかり馬鹿にした顔になることは確実である。

がっかりしたって、私は傷つかない。慣れている。

そういう人間がつける名前だから、「シニカル」の登場人物たちの名前だって、およそいいかげんである。

ツネコだって、シーちゃんだって、ツン太だって、のちゃんだって、簡単キートンにつけた。

キリコなんて、作者のズボラさをそのまま世間に示しているのだが、作者と同じ名前である。これには深い意味など全くないのである。名前を考えるのがめんどろだけなのである。この手抜きは、後々までも影響し、私は色々な人々に「キリコは私ではない。作者と名前が同じだけなんだ」と何度も何度も説明しなければならぬハメになってしまった。

新しい登場人物を登場させる場合、キャラクターの設定と同じくらいいやっかいなのは、そのキャラクターに名前をつけることである。

名前がそのキャラクターに合わない、と、うまく、彼、彼女らは動いてくれないのだ。

もちろん、キャラクターが決まると

同時に、名前もすつと決まってくる場合もある。

そういう時、彼、あるいは彼女らが本当に天から降りてきてくれたような気持ちになる。

また、キャラクターがはっきり定まっていなくても、それに名前をつけて動かしているうちに、その名前っぽいキャラクターに変化していく場合もある。名前がキャラクターに反応するか、キャラクターが名前に反応するか、それはよくわからないが、とにかく、どちらかが反応して、決して、名前とキャラクターが分離された状態のままではない、というのがおもしろい。とりあえず、「シニカル」のキャラクターたちは、それぞれの名前で収まっているので、非常に作者としては安心である。

ついでに告白してしまうが、名前に関連して、私はタイトルをつけるのも

極めてヘタである。

最初に、たまたまつけたタイトルが「マジカル・ミステリー・アワー」であった。あとは、韻さえ踏んでいけばいいわい、と流れにまかせて、「シニカル・ヒステリー・アワー」「ロジカル・アレルギー・アワー」とつけた。坂本龍一+ラジカルTV/浅田彰のビデオ「TV WAR」のブックレットに載せられた私のマンガのタイトルなんて「デジタル・イージー・アワー」である。

本当に自分でもイージーだと思う。時々、私のマンガのタイトルをほめてくださる方もいるのだが、私はその度、心苦しいような、後ろめたいような気分が襲われる。

もちろん、一生懸命考えようとする努力はしているのだが、努力しただけでは、プロとしては許されないということも、私は知っている。

# 本橋先生の整理学

二月十八日。大雪の朝。丸木美術館を訪問するため、東中野の本橋成一さん宅にあつまった。主人は早朝から築地魚河岸の撮影に行つたまま、なかなかどつてこない。記録映画作家の西山正啓さんと、ぼんやりと窓につもつた雪を見ながら――

津野 西山さん、いつも七つ道具をもつてるんですか？

西山 カメラはうちのかみさんの使わしてもらうんだけど、テープレコーダーはぼくのです。あとメモ帖。大きいのと小さいのと。あと、これ……

津野 透明フォルダーを綴じたやつ。

西山 ここに自分の映画のチラシとか、人からもらったいろいろの情報を入れておくんです。それで映画会のあとになって、自分の話ばっかじゃなくて、友だちの話とか、相手に情報をいっぱい提供するんです。

津野 ああ、そうか。あそこではこういうことをやってたとか……

西山 こういう人がいるとかね。話題がゆたかになっていいんですよ。

津野 えらいなあ。いつもそれをもちあるいてるんですか？

西山 ええ。で、半分あけとくんですよ。そこにまた、そのときもらった情報を入れて。

津野 チラシやなんか、みんなとっておくんですか？

西山 おくスペースがなくなつて、ダンボールの箱に整理してドサーッと入れてるだけなんですけどね。時間をおいたら必要じゃなくなる情報ってありますでしょうか？ そういうのはメモだけしておいて、どんどん廃棄してっちゃうんですよ。だから、いまのところ家にかさねてあるのは、『水牛通信』のほかは『子どもと行く』と長野県の『ちくま』と『映画新聞』と、あと『

水俣』ですよ。

津野 えらいなあ。おれ、みんな捨てちゃうもんなあ。

西山 だって『水牛通信』なんか捨てられないでしょう。棚にっんでおいて、人がくると「こういうのあるよ」って見せるんですよ。

津野 わあ。

西山 でもね、土本（典昭）さんはすごいですよ。新聞はかならず切りぬいてね、それも水俣とか、そういうのだけじゃないんですよ。もう全般。ぜんぶ項目別にスクラップしてあるんですよ。チラシとかも、ぜんぶスクラップ・ブックに貼りつけて。

津野 へえ。

西山 あれが生きがいなんじゃないかと思えるぐらい。だから『原発切り抜き帖』の発想はあれなんです。

津野 ぜんぶ手もとにある切りぬきできちゃうわけ？

西山 三分の二ぐらいはそうだったかもしれないですね。

津野 すごいなあ。それを毎日やってるわけ？

西山 家にいるときは、午前中、かならずやってみたいですね。そのへんはすごく勤勉なんです。逆にいえば、すごく整理能力がある。

津野 ああいうしんどう運動を長年つづけるためには、そういう基礎的な能力がないとダメなんだろうな。

西山 ええ。でもファイルを見ますと、七四、五年くらいからですね、全般的にワーツとあるのは。

津野 じゃあ、中年以降。

西山 四十五すぎぐらいから。

津野 だったら、おれも可能性がないわけじゃない。しかし、こう見ると、本橋さんとこも、ちゃんと整理されてるみたいじゃない？

本橋夫人 整理だけはすごいですよ。

津野 土本さんも本橋さんもドキュメントリストで、しかも、でっかい組織に属してるわけじゃないから、自分でやっておかないと、どうしようもないんだらうね。

本橋夫人 生活面はじつにだらしないくてね、脱いじゃボイツ、あれはどっこいだった、これはどっこいだったんだけど、自分が興味ある資料の整理だけは、まめにやっていますよ。こないだどっかのカメラ雑誌で、「本橋先生の整理学」ってとりあげられたくらい。

津野 ネガの整理なんか、ほんとに大変だらうな。

本橋夫人 ベタは大きい紙に貼って、そこに日付けとか、そのときの状況とかが書きこめるようになって……

津野 それがせんぶ、あのスチールのキャビネットにはいつてゐるわけ？ 三十ぐらいあるのかな。

本橋夫人 ちょっと見てみます？

くっちゃわないとイヤだという人もいるし、そのつど、どっかでしらべてくればいいやって人もいるし。

本橋さんが、やっと帰ってきた。

本橋 いやあ、お待たせしました。なんか、おもしろくて。

津野 大変でしたね。

本橋 タマゴ焼きと赤貝を買ってきたから……あれ、お酒のんでるんじゃないの？

本橋夫人 コーヒー。

津野 だって、いまお酒のむわけにいいじゃないよ。

本橋夫人 わっ、すごい。ウニなんかもあるじゃない。もう行く気ないでしよう、みんな？

西山 行きますよ、もちろん。

津野 待ちくたびれて、「水牛通信」のためにね、ただの話を録音させても

津野 ええ。……はあ、こういうふうになってるの。一枚一枚の紙に、撮影所、撮影日、ネガ番号、タイトルを書きこむ欄が、これハンコで押したのかな？

本橋夫人 ハンコが好きな人なの。で、ネガのほうもおなじように番号を打ってね、ホラ、こうやってはいってるの。84と84というふうな。

津野 あ、これだったら大丈夫だ。えらい。本橋さん、えらい。

本橋夫人 あと、ちょっと焼いたりしたのは、ああいうふうなテーマごとに紙箱に入れてあるのね。

津野 「キャバレー」「女子プロ」「河内音頭」——えらいえらい。しかし、これやらなけりゃ食えなくなっちゃうもんな。でも、えらい。ぼくは整理はダメですね。とっとくべきものと捨てるものとの区別がわかんなくなってるもの、みんな捨てちゃう。

らったの。ちょうどよかった。築地はどうでした？

本橋 入荷はあるけど、客がどうもね。ともかく赤貝をつくって、一杯だけ飲んでしましよう。あそこにブラック・ニッカがあるからさ。

西山 去年もね、ここにきましたら、やっぱり築地の取材がおわってね、こんなタイ三匹！ 昼からタイ刺し。

本橋 とった写真をもつてくと、「ホラ、一匹もつてけ」なんて、でっかいタイもらっちゃって、そうすると重くて写真なんか撮れないでしよう。それで八時ぐらいに帰ってきちゃったりさ。仕事にならないですよ。

津野 でも上野駅の取材より、やっぱり築地の取材のほうがいいね。

西山 実入りがいい。

本橋さん、台所へ。

西山 ぼくは一カ月ぐらいおいとくんですよ。そうすると、だんだん必要な情報と必要じゃない情報とが整理されてきますもんね。

津野 おれはそういう厳密なデータを必要とする生き方をしてないんだな。漠然たる感じだけで……

西山 でも編集者の仕事は、そういうとこにこだわってたらできない。

津野 いや、やる方はやるんじゃないですか。ぼくなんかはインチキですかから適当にやっていますけど。

西山 たとえば映画のプロデューサーとディレクターの関係みたいなものをおもっちゃうんですよ。編集者はプロデューサー。書き手だったら、どうしてもデータをもってないといけませんでしょう？

津野 そういうことはあるかもしれないね。でも、結局は気質でしょう。自分の部屋をデータベースみたいにつ

津野 西山さんは、お酒を飲む人なんですか？

西山 飲みます。高橋悠治さんと似ています。飲んで寝るときがあるんです。ユージさんは量を飲むんですか？

津野 どうなんでしょう。でも、いまはやめてますね。そしたら病気になるっちゃった。とすると、もしかしたら、お酒っていうのはからだにいいものなんじゃないかと。

西山 この空間はね、しょっちゅういろんな人がきてて飲むんです。

津野 いま西山さんはどうしてるんですか？ 例の英語版を？

西山 ええ、名取好文さんの「おもしろい学校」。四月中頃にはできます。

津野 国際交流基金でしたっけ。英語版をつくってどうするんですか？

西山 在外公館におくらしいですね。

津野 日本の学校はみんなこうだって誤解を与えるんじゃないですか？ こ



これはいい国だったことになって。  
西山 いや、コメントをつけます。これは少数派だって。

ウニと赤貝。

西山 わっ、おいしそう。

津野 今朝は本橋さん、何時ぐらいにかけたの？

本橋 六時半。もっと早くいきたくったんだけど、きのうの夜、また十一時すぎに人がきちゃったのよね。

西山 今日みたいな日はチャンスものですもんね。

本橋 そう。雪が降ると、なんとなく町全体が変わっちゃうでしょ。

津野 みんな興奮しててね。

本橋 「まいっちゃう」とかいつてもね、なんとなくうれいしの。

津野 今朝のテレビで築地から中継してたよ。エビの人なのね。お兄ちゃん

が二人で、六時になっても、まだ荷が一つもはいつてないって。

本橋 みんなトラックだからね、長距離輸送の。

津野 いい写真とれた？

本橋 いや、はんぶん遊んでるみたいなものだからね。スリップした車を撮ろうと思ったら、「おい、そのの、手つだえよ！」って。「押せ！」って。

ぜんぜん知らないのに、そういうところがおもしろいね、あそこの町はね。なんの義理もないのに、だまって手つだわなきゃならない。

津野 築地をはじめてから、もうどのくらい？

本橋 二回目のお正月がすぎたから二年目かな。月に一度か二度、思いたったときに。

津野 一つのテーマって、だいたい、どこらへんでケリがつくわけ？ どこでケリがついたって分かるのかな。

本橋 ケリって、なんなんでしょうね。一コ一コ、終わったとは思ってないですよね。上野も終わったとは思ってないし、なんかこう……

津野 いくつかの基準があるんでしょうね。三年なら三年で終わっちゃう部分と、それもふくめて十年、二十年つづく部分と、いくつかの時間があるんだろうな。

西山 ぼくらでも青林舎でもテーマをきめてやるでしょう、原発とか障害者問題とか。そういうのと本橋さんの求め方とはちがいますもんね。

本橋 まあね。

西山 ぼくらだとケリつけてしまおうでしょう。意味ばかり追うでしょう。それはそれでいいんですけど、本橋さんはちょっとちがうのね。上野駅の場合でも、新幹線が大宮始発にきりかわるところで、一つのピリオッドは打ってるけど……

津野 それが十年たつと、べつの意味をもってくるのか。

本橋 そうですね。じゃあ、ここの写真も撮っときますかね。フィルムがあまってるの。料亭で雪見酒……ちよつと、その手を。ハイ。

西山 そのライカ、新しいんでしょ？  
本橋 そう、ぼくの友だちがもってきてくれたの、カナダから。もうけちゃった、おれ。

津野 魚河岸って、なんかまきこむ力があるんですか？

本橋 ありますね。絶対ありますよ。サーカスだってね、あれ二十代でやってたら、ぼくもあそこに行ってたね、いまにいたるまで。それとおなじような力がありますよ。……これ、こないだ丸木美術館で撮った写真。まだ焼いてないんだけど。これなんかホラ、囲炉裏のまえでさ、俊さんがいるん話

やっただしょ？

津野 俊さんのほうがよくしゃべるんですか？

西山 教訓的なんです。

本橋 そうそう。

津野 位里さんは破壊型なの？

西山 雑多なの。こないだ行ったときも、二人に連絡がいつてなかつたらしいの。そしたら、行ったとたんに焼酎をさしだして、「おお、飲まんかね」だった。

津野 屋間っから。いいね、あそこ、ほんとにいいや。

西山 最初は位里さんが焼酎ナミナミ

ついで、いっぱいしゃべってくれる。ところが俊さんがでてくると、とたんに下むいて黙々と……

本橋 ほんとにそうね、あの二人。

西山 で、俊さんは、あそこのチャボが生む寒タマゴについてえんえんとしゃべりながらね、

「最近、位里は夜ねむれなくて、朝三

時か四時ぐらいに起きだして、私がおしえたタマゴ酒をつくるの」

まず風呂にはいつて、それからタマゴ酒をつくって飲むんですって。で、「俊、起きろ、起きろ」って、「私はまだ眠むたいのに」起こすんだって。「へえ、最近は位里先生、やさしくなつたんですね」っていったら、「そうなんだよ」だって。

津野 ああ、そうか。タマゴ酒を俊さんに飲ませようとして起こすわけ？

西山 そう。

津野 丸木夫妻はおいくつなの？

西山 八十五と七十四かな。

津野 おっ、雪が落ちた。ドサツと。

そろそろでかけましようか。

西山 電車で二時間かな。

本橋 東松山についたら、駅前でおソバを食べましようね。

# 料理がすべて

## 田川律

(てんごくのてんぶら)

2月11日、てんごくへ行った。てんごくは銀座にあった。てんぶらを食べた。なかなかのものだったが、つなはちより三割方高かった。

東京の人ならわかるように、ホンマは「てんごく」でなく、「てんくに」で、「天国」と書く。KDDのテレビ・コマーシャルに出たおかげで、おいそが氏になった斉藤晴彦さんが出ている「Oh SONO SONO」を見に行った帰りに行ったのだ。

その話を八巻さんしたら「あたし、前に行った時、てんごくだと思って、店内で大声でそういつたら、周りにいたお客さんがみんなこっち向いたのよ」

と大笑いした。

そういえば、この店のすぐ隣に「手打ちうどん 四国」というのがあってこれは讃岐の手打ちうどんで、東京では珍しい、薄味関西風のうどん屋であった。今はないみたい。てんごくの方はこの日が初めてだったが、しこくの方には以前に何回か行った。

むかし、結婚などしていた時、連れ合いの父親が、神戸の「魚国」という仕出し屋さんのようなところ——ほとんど父親なる人と話をしたことがないので、ホンマはどんな会社かつかいづまびらかに知ることなく、その人は義理の父ではなくってしまっただのでいまだに「魚国」という名前しか覚えていなくて、それが時折り、この「天国」とぼくの頭の中でごっちゃになる。(ファザー・コンプレックス)

ということばは、本来は、女の人に ついていうことばらしいが、このあい

だ、函館の古くからの友人、小崎さんと話していて、どうやらかれもぼくもそういうタイプ——フロイトのいう意味でなく、父親が苦手、とていうような意味で、ファザコン。だということに気付いた。さっきの義父の場合もそうだが、父なる人と話すのがとても苦手だ。小崎さんの場合は、子供の頃さんざんしかられたりしたことが理由らしいが、ぼくの場合は、碌々話す間もなく死んでしまったことが原因のようだ。おまけに、ぼくには子供がないので、父親、という感覚が見事に欠落している。

だから、とりわけ、他人の家へ行って、友だちとその父親なんかがいる時とても話がしにくい。そのかわり、とってはなんだが、多くの男が持つ、「まず父は乗りこえなければならぬ存在だった」という気持ちもいっさいない。つい先日、2月22日も、戸塚へ久

し振りに岡林信康のコンサートを聞き

に行ったら、かれの父が去年七十八歳で大病し、看病した時の体験をステージで話していた。その時も、若い時には、かれの前に壁のように立ちほだかっていた存在の父が今日の前で、小さくなって白いシャツに包まれている、ということを感じ深く話していたが、そういう気持がぼくには「実感」できない。へんかなあ。

(北の家族——ペンギンズ・バー)

なにが気持ち悪い、といって、渋谷の東急本店へ行く道の途中、右側にある巨大なビル、その中に入っている一連の居酒屋はど気持ち悪いものはないと常日頃思っているのに、その地下の「ペンギンズ・バー」へ行く羽目になった。特に、去年のいつ頃か、NHKのテレビで、これらのチェーン店が、そのメニューの幾つかを、タイで下ごしらえしている、というのを放送したと知っ

て、いよいよ行く気はなくなった。

それが、1月29日の夜は、そこにしか行けなかった。というのも大塚まきじのコンサートがジャンジャンであって、おわった時に残ったメンバーが、帯広から東京に来ているノリちゃんと飯田くん、それに厚岸から沖繩方面へ出稼ぎに行く途中で東京に寄ったという漁師のキンちゃん、かれの三人のガール・フレンド。もうひとり、キンちゃんの友だちの国鉄につとめていて分割民営におびえている人もいた。都合八人で急に何か食おうか飲もうかとしたら、しかもみんなたいしてお金を持っていないとなると、結局こういうことになってしまった。なるほど、店の中は広いから、どっかあいている。

はやるはずやなあ、と妙に感心したけど、ぼくら大学生の頃は、そういう時はいつも喫茶店へ行って、オムライスを食べて、コーヒー飲んでた、とい

う気がする。当時は大阪にいたが、キタやミナミの盛り場にきまって、マンモス喫茶があった、何階かは「団体専用」で、時には、その上が「同伴喫茶」になっていた。店は「こだま」とか「パンピ」とかいう名前がついていた。現在、それにあたるのが、このテの居酒屋だと思えば、特に不思議がることもない。コーヒーからお酒にかわったのは、その分世の中豊かになったのだからか？

(のり)

そのキンちゃん。厚岸は北海道の根室と釧路の間にある漁師町で、そこで漁師をやっているが、全国でも数少ない「魚を取らない」漁師。カキとアサリとコブとのりをとる漁師。あんな寒いところ、と思うが、ここのカキがおいしいのは、昨年の「野の音コンサート」でも食べさせてもらってわかつている。今はでも、養殖で、タネは松島から

持つてくるという。それを、五年も六年もかけて育てるのだぞうだ。

今回はお土産にのりをくれた。都会でお目にかかる。上品な。のりにくらべて厚手のようだが、食べてみるとなんとおいしいこと。まさに海の匂いがふんぷんする。2月9日には、こののりをふんだんに使って手巻ずしを作った。ぼくの歴史の中ではすしは、よそじ食べるもの、だったが、この日は見よう見まねで、すしめし。も作った。なに、ご飯をたいて、酢、酒、砂糖を混ぜたものをご飯にまぜるだけのこと。具は、トロのブツ切り、イカ、赤貝、青柳、カイワレに納豆。近頃、そのすし屋では納豆巻なんか頼むと、デコレーション・ケーキのクリームを出すみたいなのから納豆を絞りに出すが——なるほど、これならねばねばが手にくっつかない——こちらそんなものはなし。

気球をあげていた。高所恐怖症と好奇心とが相あらそって、結局好奇心が勝って載せてもらった。するすると上っていくうちは気持ちいいが、百メートルも上ると、コワイ、と思たら、そのコワイがどんどん増幅されて、気球のカゴの中に坐り込んでしまった。あとでみんなから「もったいない！ せっかく素晴らしい景色なのに」とバカにされた。そういえば十年ぐらい前、テレビ神奈川の正月番組で元キャロルのジョニー大倉と対談した時、ディレクターが「かわったところ」でと、局のアナテナ塔の上でやろうと企画。むき出しのラセン階段をのぼって行くうちに足がすくんでしもて、ジョニー大倉だけずっと上に昇って、上と下で「あんたビートルズ好きなん？」「そうでーす！」という。距離を置いた。インタビューをした。あれ、本番でどない編集されててんやろ。

〔鱈〕

雪の北海道、冬の北海道は大好き。2月も一週間ほど行ってきた。札幌、小樽、帯広、とまわったが、小樽では小説にもなった「海猫屋」の増山さんに「鱈」という店へ連れていってもらった。小樽では「一心大助」というおかしな名前の店が有名だが、こっちはもうちょっと。高級、なというか、しつとり落着いた店。板前頭(?)が増山さんと小学校から同級生、ということ。で、おいしいせのが勝手に出て来た、という感じ。なかでも、八角という魚を塩焼にしたのがとてもうまかった。それとこの店、北海道では珍しく、焼酎が、吉四六とかなんとか化学製法のものではない。

〔シェイキーズ〕

札幌にも「古狸」というおいしい店があるのだが、花金の夕方でえらく混んでいて入れなかつたため、うろう

ろして、ついふらふらと「シェイキーズ」へ入ってしまった。ジャマイカにもこのチェーン店——どんな関係か知らんけど、ま、ほとんど関係ないわな。があつて、あそこではついに入ろうと思わなかったのに、なんで札幌で、と思つたが、東京と違って少しはうまいかな——なにが？ 使われているトマトがうまいのか——と思つたが、やっぱりうまなかつた。

〔熱気球とおしよるこま〕

帯広では、市内から車で一時間半ぐらい北へ行った、大雪国立公園の西のはずれにある然別湖へ行き、その湖畔ホテルに泊めてもらった。本来なら、実験バンド。と来るはずが悠治さん急病のため三宅さんだけが来た。

帯広は道内で雪が少いとこだが、然別は山地でたっぷり雪が降る。湖は厚く凍った上に雪が積って、広い空地といった風情。その上で朝早くから、熱

然別湖では、ほかにスノー・モービルを運転したり、山スキーしたり、要するに主として遊んでたが、昨年「野の音コンサート」に来た時泊った「ヤギ牧場」の裏のトツタベツ川で釣ったおしよるこまの大きいヤツを、ホテルの養殖場まですくいに行って、刺身で食べさせてもらった。身の柔かい上品な味がした。

〔豚のお尻とアジのチーズ焼〕

帯広の手造りハム・ソーセイジの店「エル・パソ」のマスター平林さんが帰る際に「えい、太っ腹のところを見せよう」と豚のお尻半分のハムをくれた。片手でぶら下げられないほど大きいヤツで、帰っている人々に配ってまわった。もっぱらそのまま食べたが大根とハムのサラダも作った。大根を千切りにし、ハムも千切り(?)にして、コショウとレモンの絞り汁をかけマヨネーズであえる。

この時、アジのチーズ焼も作った。大きめのアジをフライパンでバター焼きし、最後に、トロケル。チーズをスライスしてのせて溶ける程度にあたためるもの。

大根は、その前はキンちゃんののりを使って、大根とカイワレとちりめんじゃこのサラダを作った。千切りにした大根とテキトウに切ったカイワレをませ、それにちりめんじゃこを加え、レモンの絞り汁、ゴマ、しゅう油をたいて、最後にのりを細かくして混ぜ合わせる。ここでもキンちゃんののりは、いい香りをしてくれた。こののり、一帖百八十円！ で売っている——もちろん厚岸のあたりでだけと思うけど。

キンちゃんは今、徳之島で砂糖キビ刈りに精を出している。厚岸ではそんな風に、外出。する人は少く、キンちゃんも、浮いている。そうだが、外出がまたかれの漁への熱意のもとだ。

# 走る・その二

## デイヴィッド・グッドマン

きょうは哲学の道をゆこう。

哲学の道というのは、琵琶湖疏水に  
そって、銀閣寺橋から若王子橋にいた  
るまでの、約二キロの小道である。戦  
前、西田幾多郎が思索の場としてこの  
辺をよく散策したから「哲学の道」と  
名づけられたらしい。東山の中腹をと  
おる、桜などが茂り、車が入れない、  
ランニングに絶好の道である。

ぼくは百万遍のわが家を出ると、京  
大のキャンパスにそって、今出川通り  
を東に駆ける。ゆるやかではあるが、  
坂道だから、つらく感じることもある。  
吉田神社の北参道の鳥居の前をとって、  
白川通りまでのぼる。信号がかわ  
るまで足踏みして道をわたり、銀閣寺  
のほうに走る。秋、この辺は観光客で

混雑して、とおりにくかったが、銀閣  
寺が拝観停止となつてから、街はしん  
として走りやすくなつてゐる。

銀閣寺橋で、疏水にそって右にまが  
つて、哲学の道に入る。左手には、弥  
勒院、法然院、安養寺など、名所だら  
け。若王子に近づくと、右手に京都  
の街の全景が見えてくる。

若王子神社あたりで哲学の道が終わ  
る。百メートルほどの坂を下りて左折  
して、南禅寺にむかう。ここからはア  
スファルトの道で走りやすい。

南禅寺の中へ入ると、左側に三門と  
いう、巨大な門が孤立している。石段  
をのぼって、門に近づく。敷居が高く  
て、ハードルを飛び越すようにして門  
をくぐる。映画『ロッキー』よろしく、  
いつもこの巨大な門の舞台の上で、手  
を頭の上にのびして、勝利のおどりを  
踊ってみたという気持ちにかられる  
が、べつになにも勝利していないから、

一度もやったことがない。

南禅寺の中門をくぐって、豆腐料理  
の店が軒をつらねている通りに入る。  
食べたいなと思ひながら通りすぎて、  
八千代という旅館の前までいく。八千  
代は一泊二食つき四万円もする。ここ  
は上田秋成が晩年をおくった土地だそ  
うで、秋成が原稿を丸めてポイと捨て  
たといわれる「夢の井戸」は依然庭に  
残されているらしい。

ヤエルとカイの大好きな動物園をと  
おって、平安神宮のけばけばしい、ば  
かどかい鳥居をすぎて、東大路から万  
里小路へ帰る。経過時間四十五分八秒。

\*

計画が大幅に遅れて、『火山灰地』の  
英訳をアメリカの出版社に発送したの  
は正月に東京へ発つ寸前のことであつ  
た。「火山灰地」は久保栄が昭和十二

年から十三年にかけて書きあげた、北  
海道十勝地方の農業的状况についての  
社会主義リアリズム劇で、作者曰く「  
日本農業の特質の概括化」および「科  
学理論と詩的形象の統一」をこころみ  
た作品である。原稿は六〇〇枚にもお  
よぶ、膨大なこの戯曲は、文字通り新  
劇運動の記念碑であり、戦後の新劇の  
基調をなした重要な作品である。翻訳  
をはじめたのは八三年の五月だから、  
ちょうど二年半かかった。

ということは、去年の秋、京都にい  
ながらも、ぼくの想像力は北海道をさ  
まよっていた。ぶつぶつ言いながらす  
すめた翻訳ではあったが、歴史の平し  
たたる、しかめつらの京都から、広  
大な開拓地に逃亡することは、精神衛  
生上おそろくぼくにとって必要なこと  
であった。

八四年の五月、岡村春彦さんと二人  
で、『火山灰地』の現地調査のため、

帯広をたずねた。ある早朝、小雨に降  
られながら、十勝川のほとりを走った。  
七時ごろだったが、川べりでおこなわ  
れていた、いくつもの野球の試合はも  
う終わろうとしていた。だだっぴろい  
土地、冷たい雨、旅で疲れて風邪をひ  
いていたぼくは、よみがえった気持ち  
がした。

それに比べて、京都を走るのはまる  
で障害物競争のようだ。走っていると  
歌枕につまづきそうである。吉田兼好、  
法然上人、上田秋成の幽霊が群れをな  
して、おっかける。桜の木の下には、  
死体が埋まっていそうで、おっかない。  
木、道、空、建築物、あらゆるものに  
こびりついている記号、意味は濃霧の  
よう、どんなに早く走っても、切り  
抜けられない。

京都にいなから北海道を考えている  
と、久保栄、有島武郎、小熊秀雄など、  
たくさんの近代作家や詩人が北海道に

なにを見たか、わかるような気がする。  
京都をはじめ、「内地」全体は単なる  
生活の場ではない。理念の塊である。  
記号、象徴、意味の蜘蛛の巣にたく  
きつく縛られている。久保などは、縛  
られていない、幽霊の出ない北海道の  
空間に日本人の新しい可能性を見出そ  
うとしていたにちがいない。反復では  
ない歴史、解放にむかう線状の歴史は、  
北海道なら想像できる、ということだ  
ったのではないかとぼくは思う。

だが北海道の「内地化」はもはや決  
定的であり、進出してきた日本の幽霊  
たちはもう追いつけない。残念だ。北  
海道の「内地化」ではなく、京都の鞆  
夷化が企てられたら、どんなにおもし  
るだろう、と思えてならない。その  
ほうがずっと走りやすいにちがいない。

# 病氣・カフカ・音楽（その一） 高橋悠治

信仰を自分のことばと自分の納得との間に正しく分配すること。納得したことが、それを体験した瞬間にしゅっと終わらないようにする。納得が負わせる責任をことばによって盗まないこと。納得をことばによって盗ませないこと。ことばと納得したことの一致はまだ決定的ではない。よ

本をよんでもすぐつかれるので、興味のもてないものをふりすてて、選んだものをゆっくり、またはくりかえし、よんだりきいたりすることになる。北ヨーロッパに3年、アメリカに6年いた間は外国人のくらしとアウトサイダーのしごとしかなかつた。週一度ともだちに会って、月一度あるかないかのコンサートで演奏する。それ以外には家で、あてもなく作曲し、ピアノを練習し、本をよみ。東京にもどってからの数年はしごともそんなになかつたから、おなじようにすぎた。だが、いつか生きていることからなれて、しごとだけがスピードをあげていく。しごとのために生きるようになる。しごとに支配されている。しごとがあるのが当然だとおもっている。生きていく日々の、あのゆったりしたりリズムのなかにしごとをひきもどしてやることを忘れて、ひき返せないところまで踏

い信仰でもそうだ。そんなことばがそんな納得をいつでも状況によって打ちこんだり刻みこんだりできるのだ。

発言は、原則として納得を弱めることを意味しない——それについては嘆くこともないが——、それはむ

みこむ。ことばで社会を批判しても、そこにくみこまれていくのだ。批判を口にできるのもアウトサイダーにはゆるされなかつた特権だつた。そんな時だ。無視されたからだだが、そこにあることも知らなかつた器官から停止信号を送るのは、病氣は警告でもあり、休息でもある。一息つく、そこに展望がひらける。それも錯覚かもしれないが。

病室の窓の向うの夜明けはいちめん白っぽく、地平線の向う側が影のように青い。その上に赤紫の帯があらわれる。それがうすれるにつれて、遠いピルの白が輝きを増してくる。近くの方は影のなかにある。光が白い反射からあたたかい色に変わり、やがて、影になつている町も光のなかに浮かびあがる。この変化を感じるには、じつとながめているより、目をそらして、時々ふりかえる方がいい。

しろ納得の弱みなのだ。（カフカ）

病氣は突然はじまる。おもいがけないところの、おもいがけない痛み。それがうすらいでいくにつれて、自信がもどってくる。だが、これからが本当のはじまりなのだ。健康だと信じていた間も病氣はもうそこにあつた。それはいま自覚症状さえないからだをしっかりとつかんでいる。からだだけのものともいえないだろう。健康でいた時間全体にわたって、生きていることそのものが病氣の表現だつたと、おもひあたることになるのだ。その時はもう病院にいる。

まずはベッド上安静。点滴。横になつていてできることは、本をゆっくりよむこと、ヘッドホンでラジオかカセットをきくこと。ヘッドホンは音を耳のなかにいっばいにひびかせるので、なんとなくききながすことができない。

病氣がすこしよくなると、食事は食堂でたべる。ガラス張りの壁の向うに二七〇度にひろがる地平線までの都市を見おろしている、未来の塔のなかにおきざりにされたようだ。地平線がまがっているから、地球はまるい。この都市の屋はほとんど白い廃墟。夜は遠いピルの色とりどりの灯があつて、昼よりも人間らしく、なつかしい。

病院の日課。午前5時、検温。脈をとり、必要なら血圧をはかり、検尿、検便、採血。8時、朝食。午前中は各種検査。12時、昼食。検温、脈、血圧。3時から7時、面会時間。5時、夕食。食事がたべられたかどうか、どこか痛むか、排尿と排便の回数を記録する。人間は管の束にすぎない。その入力と出力の記録と点検から一日をくみわたる。

病院にいと、からだは自分のものとはおもえない。からだはだれの

ものでもない、別な生きもので、それをあずかっているだけの自分がいる。からだのなかには何があるのか、時々耳をすましてみる。かすかな信号でもきこえてはこないだろうか。

健康でいた間に内側をきく力は弱まった。さむいとか、いたいとか、基本的な感じにもぶっている。壁の向うから伝わってくる合図のようだ。それに直接こたえるかわりに、習慣になった反応ですませる。それも、かなりおくられて。たいしたことはない、と決めてから。

おかしいな、とおもう瞬間もあったが、それもたちまち過ぎた。

健康がからだをおさえつけている。そのとき、病気はもう内側に食いこんでいる。

健康な人間のステレオタイプとなつた反応は、その人と世界との間の関係の決め手になっている。世界を自分の

ものとみなして、おさえつけているうちに、さらさらとこぼれていくものがある。ひびわれを食いとめようとして、攻撃にでると、ものごとを一層わるくする。

表現を方法でおきかえること、何も感じていないのに発言すること、表面のゆたかさをけずり、みがきながら、するどく、同時になめらかな刃となつて、世界のほんの端でもいいから、傷跡をのこしたいという衝動。

この病室は6人部屋。それぞれのベッドの上で6人が、それぞれちがう病気が、ちがう時間を生きる。ことばをわけあい、ひとの病気が何か、ここにくるまでにどんな生活をしてきたかを知りたがるのは、むしろ自分の場合とのちがいをたしかめるためのようだ。となりあわせはまったくの偶然、ただようポートが風に吹きよせられただけ。ルクレティウスの原子のかたよりのよ

うに、おたがいをしるべることのないつきあい、友情の見かけが生まれる。見かけにすぎないのか。友情というものも、吹きよせられてとなりあわせる限られた時間のなかに、限られていると知っているからたいせつにされるのでは。やがて、それぞれの時間がずれはじめ、いつの間にか相手を見失う。

ここにいと、待つことをおぼえる。自分では何もできずに、医者や看護婦にしてもうまでじっと待っている、というだけでなく、何よりも、からだかひとりだけで回復していくのを感じながら、ただ待ちつづける日々。

病名どころか、からだのなかで何が起っているのか、本人も医者もわからないままに入院している人たちがいる。すこしずつさぐりをいれながら、じっと待っている。何を待っているのか、だれもわからずに。

病院の夕食は5時。その後はもう、

することがない。自分のベッドのまわりにカーテンを引き直し、消燈時間を待たずにしずかになる。それぞれの病気だけを相手に夜をすこすのだ。

それはたいがい夜中におこつた。突然ゴボゴボと水の音。「だれか。ボタンを押してください。」夜勤の看護婦の急ぎ足の足音。病人をベッドごと運ぶだす。次の朝、拭ききれなかった血の跡が黒ずんでいる。昼間病気を忘れていても、病気が追いついてくる。

昼間入院してきた時は、何の病気なのか、ただしずかにねていた人が、夜中に突然あえぎだして、その合間に、「くるしい、くるしい」とつぶやき、その声がだんだん大きくなる。当直の医者がきて注射をすると、たちまちしずかになった。ところが夜の明けきらないうちに、またあえぐ声。3回ほどで、「たすけて」と小さな声が出て、急にしずかになる。発作がおさまった

のか、それとも、様子を見に、向いのベッドまでいったものだろうか。

看護婦の足音がちかづく。大声で名前を呼んでいる。からだをバンバンたたく音。もう一人の看護婦と医者がきて、ベッドごと運びだす。次の朝にはもう、遺族がロビーにあつまつて、葬式の相談をしている。

本当にたすけをもとめる時、人間はあんなにつつましい声しかあげないのか。たすけがくることもほとんど信じていない声。だから、それをきく方も、たすけが必要なのか、自分のなかにとじこもつたつぶやきなのか、よくわからないままにききすこしてしまふ声をのこして、ひとりて死んでいくのだ。それに、そうなるから、他人に何ができるだろう。死んでいくことをひきうけた人のしている何かを、むだにそらし、さまたげること以外の何ができるか。だが、これだつて仮定にす

ぎない。だれもたしかめるわけにいかないのだ。

人は夜明けに死ぬ。夜明けを待ちかねて、しかもその光にさらされることには耐えられない、とでもいうように。

夜のこわさ。夜でないこわさ。

ひとことでもいい。もとめるだけ。空気のうごきだけ。きみがまだ生きている、待っているというしるしだけ。いや、もとめなくていい。一息だけ。一息もいらぬ。かまえただけ。かまえない。おもうだけで。おもうこともない。しずかな眠りだけがいい。(カフカ)

すこしよくなると、病気を忘れる。世界がしたいものに見えてくる。だが、病気はいつでもそこにある。

(つづく)

# 音楽時評

## 坂本龍一

(CONCERT)

①2月8日、武道館に「FOE+J・B」を見に行く。FOEとは細野晴臣さんが新しく始めたバンドでFRIENDS OF EARTHの略です(これをイニシャルイズするなんて、とってもユニーク)。ヒップホップのスタイルにすごく近いんだけど、つまり機械的ビートやラップやら、何となくニューヨーク産のとは違って聴こえる。日本人っぽい丁寧さ(悠治さんが前書いていた)の問題。これは僕にも言えることだけど、表面をツルツル磨いてしまう癖から抜け出られない。

コンサートとしてはFOEの完全な失敗。あんな広い場所でパフォーミングスみたことをやっても全く伝わらないし、ジェイムス・ブラウンのファンを前にして、テクノ風のアレンジで超ヒット曲「セックス・マシーン」をやるという神経も全く分かりません。又、PAの音質がハードすぎて1Fで聞いていても耳が痛かった程。それにガイド・クリックが外にもれていて何とも恥ずかしかかった。演奏自体はちゃんとやっているのに、その他の失敗が蓄積して悲惨なものになってしまった。細野さん、がむばってください。

2部のJ・Bはさすがにこの道20年。最早、伝統芸の域に達していて、言う事無い。唯、前回見た時より老いが増していたのが気にかかる。恒例のガウン掛けもたった2回しかやってくんなかった。前は10回もやったのに。

②2月21日、青山円形劇場で「矢吹誠

十横浜ボートシアター 始原聲聞

饗宴の森へ」というものを見た。少数のアジアの楽器と手づくりの沢山の楽器。矢吹誠は元黒テンの音響をやっている、僕も手伝ったりした仲間だ。二人で武清徹や秋山邦晴を中傷するじらを作って、今はもう無き現代音楽のコンサート会場に撒きに行ったりしたものだ。あんなに過激だった矢吹が、「深くアジアを哲学する心」などと書いているのを見て足がよろめいたが、それは置いておいたとして、いまいちのところ「音楽」になっていないのが、残念だった。確かに会場には懐かしいアジアの音が鳴り響き、それはそれで心地良いものだ。もちろん音楽はプロが占有するものでもないし、たった一つの鐘の音に自分を同一化させて深く共鳴させることで近代的な世界観から自己を解放する態度も分からぬではないが、そしてそこに70年代型はい

わゆるヒッピーのりのエコロジとは少し異なる新しい芽があることも何となく感じるのだが、余りにピュアすぎるものに対しての反発はどうしても押さえることはできない。創造力の衰退は各所で起こっている。こんなことは新しいことではない。心地良いアジアの音色に衰退するのも、過激にハイテクする衰退もメダルの裏表だ。こんなことも言われ続けてきたことだ。外部へ、外部へと突き進んで行った先が自己の深奥の内部だったりするとう図式にも、そろそろ飽きてきた。

(RECORD)

①昨年の7月から10月までレコーディングしていた矢野頭子の新作「峠のわが家」がやっと発売された。金と時間を費やしてパワーステーションまでドラムの音を録りに行っただけのことはある。ほんとにいい音してる。ガッツがある。それにもまして、そんなガッツ

ツのあるドラム・サウンドを従えて、フニャフニャ歌ってる矢野頭子はスゴイ。照れるな。これは一年に一枚のアルバムです。

②で、それに続いて11月から2月28日まで録音していた僕の新作「未来派野郎」もやっと出来ました(4/21発売)未来派とは1909年にミラノでマリネッティを中心として開始された芸術運動ですが、その中の一人、ルイージ・ルッソロが発案したイントナルモノなる楽器こそ、世界初のサンプリングマシーン(正確にはノイズ発生器)でありまして、フェアライトを中心とする昨今のサンプリングマシンの発達こそ、未来派野郎達が夢に描いていた道具「テクノロジ」なのではないか。彼らの夢がエレクトロニクスを駆使できる現在、やっと達成されつつあるのではないか、というアルバムな訳です。未来派野郎共の機械・スピード・戦争

・電気等に対する愛の宣言は、そのまま現在の資本主義的環境を言い表しているのではないか。強引に20世紀は未来派の世紀だった、なんて言ってみたりする訳です。因みに現在最も注目しているレーベルで、トレヴァー・ホーン率いるイギリスのZTTはマリネッティの自由詩ZANG TUMB TUMBのイニシャルであるのだ。

(DJ)

3月をもってNHK・FMの「サウンド・ストリート」を降ります。水牛も紹介したりして多少は貢献したかな。

(GAME)

現在までのほとんどのゲームソフトは客観映像だったが、「ZONE」というソフトは主観映像です。しばらくやっていると完全に体が浮いている様に感じられます。手が腫痛炎になっちゃった。

# 水牛かたより 情報

●ニコ。4月10、11日。渋谷THE

LIVE INN。6時30分。前売3  
900円、当日4300円。問合わせ  
スマッシュ会444・6751。

ニコという謎の女がくる。メンバーは  
二人のキーボードとドラムス。本人は  
水牛楽団と同じハルモニウムをひくと  
いうこと以外、何もわからない。でも  
何があるかわかっている人よりはおも  
しろそう。  
(田川)

●「ナチュラル・ヒストリー」ローリ  
ー・アンダーソン。4月3、4日。日  
本青年館。7時。4月10日、7時。12

日、3時、7時。簡易保険ホール。前  
売4300円。当日4800円。問合  
わせ、ツルモトルーム会406・13  
51。  
この前は体中にマイクを埋めて、人間  
打楽器をやっていたが、今回は何をす  
るのかなあ？  
(田川)

●「ぼくの演説」江原光太ガリ版詩集  
(限定二百冊、五百円。札幌市東区北  
31東2・7・202創映出版)

このワープロ時代にわざわざ輪転  
写印刷機を買って詩集をだす詩人もい  
るのだ。「印刷技術が革命的に進歩を  
遂げたばかりに、ぼくらのもっとも  
安あがりの、原始的なガリ版技術は、  
詩を道連れにして、とっくの昔に死ん  
でしまったのである。」とはいうもの  
の、まだ死にきれずにいる詩精神がこ  
こで出版業をかねてほそぼそとつづい  
ている。「ガリを切るときのカリカリ

という音、あれは魔性の音楽とみえて、  
ぼくの脇腹はこそばゆくなった。」

「ぼくはいままで七冊の詩集をつく  
った。そのうちガリ版詩集が三冊ある。  
活版であれ、オフセット版であれ、そ  
れを詩とよぶには気がひけるが、詩に  
通じる作業であったことは確かだろう。  
詩をつくることは才能であり、努力で  
もあるうが、なによりもひたむきに生  
きることもあったのだ。のんびんだ  
らりにみえようが、なりふりかまわず、  
自分とたたかいたがら。無頼派・野  
盗のかたわれとして。

ぼくなど六十才になって、まだ詩人  
の域に達していない。まして七冊の詩  
集をつくるなど、おこがましい限りだ。  
ほんとうの詩人は、生きていくうちに  
詩集などに眼もくれず、ひたすら声も  
たてずに、喉の奥で歌っているのかも  
知れない。そんな友人たちの姿がとき  
おり、ぼくの高慢なところを、激しく

打ちつけるのである。」

札幌の居酒屋で焼酎のコップを前に  
いつも若い人たちといっしょにいる江  
原さん。自分の詩集を質にいたれた小熊  
秀雄やシベリヤ帰りで精神病院で市街  
戦を夢みながら死んだ同志に心を通わ  
せ、死んだ奥さんの写真に水をそなえ  
ながら、若い女たちに惚れては振られ  
ているのだろうか。「ぼくの演説」と  
は氣ばった題だとおもったが、よんで  
みると、からいばりすることばはどこ  
にもなかった。「喉の奥で声もたてず  
に歌っている」詩といっしょに生きて  
いくのは、なかなかすてきなことで  
ないか。  
(高橋)

●「かえるのごほうび」木島始  
鳥獣戯画絵巻を見開き絵本にくみため  
なおして、ひらがなの物語詩をつけた  
もの。こうしてことばがつくと、あら  
ためて絵のこまかいところまで見て、

いきいきした動物たちの表情やのびの  
びと抽象化された水や枝の流れる線に  
感心する。木島さんのことばも、うさ  
ぎやかえるといっしょにとびはねてい  
る。「ねらえ ねらえ まとのまん  
か おへそを ねらえ/やあい かえ  
るに おへそなんか あるもんか/あ  
っ そうか はっ はっ はっ」

「ぎゃういー ぎゃういやあー やあ  
ー/やっ やっ やっ」と、おうえん  
だん。さるのおきょうは「なむ なむ  
きょお けきよおー/きょお けい  
う けきょう ほくきょう」。いそぎ  
足でもどことなく字余り風なのが木島  
さんのリズムだね。最後は狂言風に、  
「うさぎと かえるは どこまでも/  
ずるがしこい さるの にげるのを/  
おいかける ならみつける おいかけ  
る/どっき どっき どっき」  
(佑学社 九八〇円) (高橋)

●ベルトルト・ブレヒト「子供の十字  
軍」長谷川四郎・訳 高頭祥八・画  
(リプロポート 千円)

これも絵本。現代絵画のテクニク  
をいろいろつかっている。地平線上に  
うかぶ鉄かぶと、こどものかなしい目  
と火の柱。夕日とからすの群。枯木と  
黒い少女の横顔。

ふしぎにおもうのは、はじめ50人い  
たこどもたちが、死んだ子もいるのに  
いつの間にか55人にふえていることだ。  
ブレヒト学者の説明をききたい。  
(高橋)

●エティ・ヒレスム著 大社淑子訳

「エロスと神と収容所 エティの日記」

(朝日新聞社朝日選書、千四百円)

アムステルダムに生まれたユダヤ人女  
性エティの一九四一、二年の日記。と  
いう事実から抱く想像だけではとても  
とらえきれない日記。  
(八巻)



編集後記

午後、ジョン・ゾーンさんが遊びにきた。きょうも「ぼくのトクチョウ」と本人がいう左右色違いのソックスと靴をはいて。編上げの、もともとは白い靴。右が紺、左は赤に塗りわけてある。二月から三カ月間、東京にいて、いろいろな人と演奏をする。その間は高円寺のアパートの小さな部屋に住んでいる。何を飲む、ときくと、水、という返事。お茶もコーヒーも苦いし、カフェインがあるからヨワイんだ。去年浅草の木馬館という、ふだんは浪曲をやっているところで、彼と津軽三味線の佐藤通弘さんとの演奏を見た。木馬館にとても似合っていた。おわると、長い足ですたすと近くのレコード屋に行く。歌謡曲のレコードのコレ

クターなのだ。好きなのは尾藤イサオや克美しげる、弘田三枝子など、60年代後半のもの。曲もかっこいいし、ジャケツトもいい。「ジョニー、リメンバリーミー(と、歌う)なんていいよね、知ってるでしょ? 悠治さん」「知らないねえ、そのころいなかったもん」「あれ? だけどジョンだってそのころはいなかったよね、日本に」歌謡曲のすばらしさを人に説明して納得させるのはとてもむずかしい。ニューヨーク中で三人ぐらいじゃないかな、わかるのは。きのう見た「ストレンジャー・ザン・パラダイス」がおもしろかった、と言ったら、ニューヨークに住んでると、ああいうのはおもしろくない、それよりテレビで見た「肉体の門」はスゴイ、信じられないよ、と彼は言うのだった。四月は毎火曜夜、新宿シアター・プーに出るそうだ。見に行こう。(八巻)

\* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会  
口座番号 東京四一九一七九二  
購読料 一年分三〇〇円(送料共)  
住所 氏名、電話番号、何号からと明記。

\* 本誌は次の書店にあります。

- 模索舎(新宿) ☎三五二一三五七
- ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
- 信愛書店(西荻窪) ☎三三三〇四九六一
- ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一八三〇二
- アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
- カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
- ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
- 名古屋ウニタ書店 ☎七三一一二三八〇

水牛通信 第八巻第二号 一九八六年  
三月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田  
正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎154  
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方  
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座  
東京四一九一七九二 印刷所 佛トライ  
プリントショップ